

“平均的人類”の願い

——「日米市民会議」に参加して——

小松左京

八月四日、夏バテと海外旅行中にたまった原稿にフラフラになり、夜中一服して、東京のベ平連事務所、何となく情勢をききに電話すると、出た相手の電話をいきなり横から小田実がひたたくって、例の猛烈に早口の、猛烈にカンだかい——つまり彼が、戦鬨的

照れ性である証拠の——声でわめきちらした。「コラオッサンオ前ナニサポットルンダハヨデキテッタワンカイアホゲンコウナンカホツタラカシテマエナニボヤボヤシトルカホンマニドウデモエカラアスキテテッタエ△□×○◎……!!」

稀なことに、手もとにストップウォッチがあつたから、こんなチャンスはめつたにないと、大急ぎではかつてみる。——五秒間に二十字のスピードである——このスピードは、かつて早口で売った司会者大久保玲なみであり、『天使よ故郷を見よ』を、タイプで書きとばしたトーマス・ウルフを凌駕し、しかもジェームス・ジョイス

の好きな彼だけあつて、マダム・ブルームの独白のごとく一つの区切りもなく単語がつづいていく。——あつけにとられているうちに、「……スグコイヨスグクルナホンマニコイヨ！」でガチャンと切れた。

これが、いつてみれば、私にとつての「ベトナムに平和を——日米市民会議」の始まりであつた。

むろん、小田をはじめ、ベ平連の人々にとつて、始まりはずっと遠い所にあつた。そもそも、ベ平連なる、画期的なものに発展し得る可能性のある一つの運動が起つた時から、この考えようによつては何とも不思議な会議、また同時に、第二次大戦の後、どうしても早く、こういうことが思いつかれ、実行されなかつたかと、コロンブスの卵のごとく、あたり前みたいな会議の萌芽は内蔵されていたのであり、さらにそのはるかな淵源をたずねれば、戦火で焼

ただれた廢墟の中にたつて、政府の施策も、何とか派のスローガンも、新時代の精神に期待する文学者の美しい声明も、何の足しにもならず、疲れ果てた体をひきずって焼けあとの材木をひろってきて自分の手でバラックをたて、妻子のためにあてもなく食物を探しに行き、それでも、生きのこつただけましだと、みずからなくさめながら、すさまじく世界の中を、何とか相互の人情にたよつて再び生きはじめた人々が、ふとカンカラカンに晴れわたつた空をおおいだ時に、その胸に芽ばえたものかも知れなかった。——むろん、その身が今日まで生きのびるために、さまざまな迂余曲折があつた。いろんな運中が、いろんなことをいって鼻づらをひきまわした。演ずる本人が、まず自分の手品にひつかかっているという入神の觀念の手品がいくつも演じられ、汝らこそ未来を荷うとか、お前たちは愚昧だとか、いろんなことがいわれ、英雄的なんで言葉の好きなお兄いさんが、英雄的という言葉を鼻先でふりまわし、隣りの国で、自分たちと同じような人間が何十万人と死んだ戦争がまたあり、あつた国だの寒い国だの、またいやというほど人が殺された。そして、

またいま——同じような顔をして、同じような米をつくっている小さな国で、長年支配していたよそののをやと追ひ出し、首相と称する血みどろのカトリック教徒をやと始末したと思つたら、今度は、関係のない国の爆撃機が、爆弾やナバームや毒ガスや植物枯死剤をまきちらす。——その時、ふたたびあの記憶が、人々の胸にうずくような共感をもつてよみがえつてきたのであろう。空から降る火の雨に家をやかれ、肌を焼かれ、愛児を鉄片に貫かれ、丹誠こめた貧しい田をちりちりに枯らされて、硝煙の中をにげまどつていのは——私たち自身であり、私たちの肉親であり、私たちの恋人であつた。あつた泥田の中をはいまわつてい、私たちの両親であ

り、祖父母だつた。私自身が、嘘でも誇張でもなく、北爆のはじまつた頃から、十数年来見なかつた空襲の夢を度々——はつきり記憶しているだけでも両三度——見るようになった。——夜半、どこかで不吉な怪鳥の叫びのようにサイレンが吼えはじめ、やがて夜空をゆすぶるような爆音がきこえはじめ、砲声がとどろき、つづいてあの無数の金属塊が空気を切るザアッという音が頭上におおいかぶさる。心臓のとまるような思いではねおきると、轟音がひびきわたり、熱い土砂まじりの風が横面をひっぱたき、眼の前がまっかなのだつた。だが、むろんそれは夢で、傍には妻子が安らかに寝息をたてているのである——時には、夢からさめたばかりの眼に、妻子の姿が、やけただれ、半分炭になって、裸の手足をちぢめた焼死体に見えたことさえある。

ベトナムの惨禍は、二十一年前のこれらの記憶をはつきりよびおこし、そのことによつて、ベトナムの普通の人々と私たちの間に——人によつては一方的というかも知れないが——一つの連帯ができあがつた。国際政治の盤根錯節はいかにあろうとも、とにかくそれは無条件に不正である、という絶対的な確信が、私たちの舌のつけ根、体の芯からどうしようもなくよみがえつてくる戦争の「味」によつてゆるぎないものになつて行つた。——それがベ平連の誕生につながり、小田の「難死の思想」につながり、全世界の「あたり前の人間」の戦争反対のための連帯という考え方をうみ出し、日本における第一回・日米市民会議へとつながつて行く。だから——すくなくとも日本側においては、この会議は、二十一年前のあの日に、その準備の種がまかれたといつていい。

むろん、実際の準備のために、裏側で多勢の人たちが、大変な努

力とエネルギーをつぎこんで働いていた。——ベ平連の人たちは、みんなそうだが、誰も「平和運動の専門家」はいなかった。作家はそれにいれないにしても、みんなそれぞれの職業をもつ、普通一般の市民であり、時間と労力をさくために、生活上にかなり犠牲を払わなければならない人ばかりだった。——昨年の、ニューヨーク・タイムズ反戦広告をピークとする一連の運動において、ピュローをひきうけたばかりに、生活がパンクしかけた人もある。一年間、この運動にかけずりまわって、顎のひ上りかけた作家もいる。ありとあらゆる職業の、こういう人たちがばかりの手で——数多くの「一般市民」の自主的、活動によって、今度の会議も準備されて行ったのである。

機関車役はもちろん小田実だった。——会議の構想の核も彼から出た。ベ平連の発起人の一人でもあった彼について、今さら何も紹介することもあるまい。「何でも見てやろう」で有名な彼は、古代アテナイにおけるソクラテスの断罪と民主主義の崩壊を題材とする、千二百枚の途方もない力作を書いた堂々たる作家であり、——英語国民でないまでも、日本語がもうほんの少し国際的だったら、世界的にもっとはるかに高く評価されるだろうと思える作家と作品がいくつもあり、小田と、彼のその作品もその一つであると、私は確信している。——平和運動にはもとよりアマチュアであり、終始アマチュアとして、つまり「あたり前の人間」として発想し、動いた。——だが、彼は、非凡な行動力と、非凡なバイタリティをもった「モーレッツなアマチュア」だった。これをやるべきだと思つたら、例の早口で、ものすごいいきおいでまくしたてた。アジではなくて意見を……。市民会議の発想がうまれる前、彼は例のバイタリティで、世界中をかけずりまわった。アメリカを、ヨーロッパを、

ソビエトを、アジアを……。メイラーにあり、東部の学者や学生やニューレフトのインテリと議論し、バートランド・ラッセルに強引にあり、例の早口で、「あんたから平和運動をひいたら何がのこるか？」とまくしたてた。「プリンキピア・マテマティカ」を書いた、老貴族科学者は、さぞかし毒気をぬかれたことだろう。フランスではサルトルに面会をもとめ、「あかん」と判定し、ソ連でエフトン・エンコとあい、猛烈に意気投合し、彼のオーバーをもらい、日本にこいよ、といった。そして、多くの人たちから、日本へ行く、という約束をとりつけてかえってきて、ベ平連の中核の人たちと、また猛烈に議論をやり、みんないっしょに構想をつくり、あちこちの集会で講演した。まず第一回は、アメリカの国内で、日本よりかなりむずかしい状況下で、ベトナム反戦の運動を精力的につづけている市民代表者たちと会議をひらく。そこで、日本の国内の動きを實際に眼で見てもらい、彼らの当面している状況を、大ざいの人たちともにつき、日米統一行動をはじめ、具体的な行動をきめる。会議のあと、各地で遊説してもらう。

裏方の人たちが動き出した。連絡、準備、プログラム作成、交渉資金かき集め——みんな自分の仕事をもっている人たちだ。会議連絡は夜、仕事が終わってからおこなわれる。サラリーマン、主婦、学生、オフィスガール、学者——組織には何の強制力もない。自発的協力だ。舞台裏で大きくまとめて行く、大変な才能をもつた人も、ここでは別に何の権限ももっていない。一見アナキイでとりとめもないが、めいめいが自主的に決定をまもる、というただそのことだけで、事が動いて行く。「すみませんが……やってくれませんか？」「そうですな——なんとかやしましょう——むろん、白熱の議論もあるが、組織の基本型はこの形だ。これで事が進んで行く

のが、何だか不思議みたいだが、進んで行く。あちこちから寄附がくる。粟津潔氏が、GOI 1500000、NOI 5001のポスターを寄附する。

十日——アメリカ側、会議代表者到着。各国からのオブザーバーも続々到着。打合せ会議がはじまる。すでに早くから来日して、各地のベ平連主催の講演会などにまわっている、ボストン大学政治学教授ハワード・ジン氏夫妻の顔も見える。会議運営の段取りについて、うちあわせがある。——日本側六十一名、アメリカ側九名の会議代表リストと各国からのオブザーバーのリスト、議事日程は別表の通り。——そして十一日。

会議は、大手町のサンケイ会館五階の国際会議ホールではじまった。八十名がすわれる馬蹄型の議席と、オブザーバー席、記者席、階段式の傍聴席、同時通訳設備のある、本格的な国際会議場だ。私の席は、開高健と安田武氏の間、——安田武氏は会議中まだ髪がふさふさしていたが、終戦記念日のテレビを見ると、まる坊主になっていた。桑原武夫教授の白髪が見える。久野収氏の閉会の辞で、会議がはじまった。「この瞬間にも、ベトナムで人が死んで行きつつあることを念頭にいれて、この会議をはじめたい……」

そう——そのことなのである。私たちは、冷房のきいた国際会議場にいる。そして——同時刻の、同じ地球の上の、亜熱帯の水田の中で、貧しい中からやっと思勞してつくり上げた家や道路や水田を片はしから破壊され皮膚についたゼリー状ガソリンの高熱にころげまわりながら、死んで行く人たちがいる。その前日、私は知りあいの外人記者から、アメリカ軍がベトナムでつかい出した、CBU爆弾のことをきいた。——軍事施設の破壊のためではなく、ナバームよりさらに徹底して、人間殺傷のためだけの爆弾だ。私たちも戦

争中経験した、例の「モロトフのパン罐」、親子爆弾に似たもので、焼夷弾のかわりに散弾がいっぱいつまつた子爆弾をつかう。一発の爆弾の中に八百発の子爆弾がはいっていて、空中でちらばり、どんなものかげにいても、散弾の雨が、四方八方からおそいかかちて、五十九人の子供が死傷した。——席にすわっている私の眼前に、二十一年前、神戸の灘で見た少年の死体が眼にうかぶ。うつぶせになった背中に、ギザギザの鉄片がいっぱいつきささっていた。血はあまり流れていなかった。この瞬間に——いい年をして、時々どうしようもなく、自分に一種の超能力がつかえたら、と思う。この瞬間に、一切の殺人兵器が無効にできたら、と……。その時も、忍者にあこがれる子供みたいに、そのことを考えつつ、自分が恥ずかしくなって我にかえる。

アメリカ側代表のデリンジャー氏があいさつする。ニューレフトの雑誌、「リベレーション」の編集長だ。——同時通訳が悪い。非常に悪い。はつきり、ゆっくりしゃべってくれるので、直接きいた方がよくわかる。まいているうちにアメリカにおける平和運動の、体臭のようなものが、何となく感じられる。そのことが、私をちょっと緊張させる。しごくあたり前のことかも知れないが、直接「警戒に接する」ということが、コミュニケーションの上で、きわめて重大なことも知れない、という感じがしてくる。レポートで読んだだけでは、人間のコミュニケーションの中で、思いがけないほど重要な役割をはたしている、何となく雰囲気を感じとる「嗅覚」がほとんど封じられている。とにかく直接あつて、話すということ、かなり重要なことだ。——現代は、この点の重要性が、世界的規模で、次第に気づかれつつある時代ではないだろうか？

日本側冒頭演説は、小田実がやった。——彼は、持論である、「国家のいかなる権力にも優先する、あたり前の人間の生きるための権利」の理念と、この理念にもとづく、「人民の安保」の構想をのべる。同時通訳のためか、彼としてはめずらしく、ゆっくりと、わかりやすくしゃべる。——正直いって、今度の会議で、私が一番注目していたのは、この「日米反戦平和市民(あるいは人民)条約」だった。鶴見俊輔氏が、うちあわせ会の時に、笑いながらいつた。「君、これはSF作家に対する挑戦だね」

私はそうは思わない。SF作家のファンタジイは、はるかにほるかにベシミスティックだ。ベシミズムなしで、むごたらしい宇宙や何億年もの時間を相手にすることができるわけではない。——だが、一市民としてなら、このアイデアの中に、無限にふくらんで行く希望の芽を見出すことができる。これはSF作家に対してでなく、国家や職業政治家に対する、「あたり前の人間」の挑戦であろう——すくなくとも私はそううけとった。

「人間は、一人ひとり、自分の住む国家の法よりもさらに基本的な正義と人道と普遍原理に導かれ、拘束されている。そして平和に生きる権利こそ、この普遍原理のうちでも、もっとも本質的なものである。世界のどのような国家も、自国民、他国民の別を問わず、人間のその権利を犯し、生命を脅かし、奪い去ることは許されない」(条約案文より)

この単純明快な言葉が、「あたり前の人間」の自発性によって発せられるまでに、戦後いかに長い時間を要したか——二つの国の、「あたり前の人間」同志の自主的、直接的な反戦平和条約の形をとるまでに——「平和愛好諸国民間の連帯」という抽象的な政治スロガンは古くからあったが——どれほどの迂余曲折があったか。

——私自身の感じからいえば、条約の表現はまだ生硬すぎる感じだし、行動綱領の中のあるものは、まだラジカルすぎる感じだが、基本的発想には、無条件に賛成だ。国家の戦争政策、国家の軍事同盟に反対して、ふつうの市民反戦が共同行動をおこなうことを約束したこの条約は、大衆化されることによって、もっとも大きな効果が発揮されるだろう。——そして、こういつた、まったく新しい原理にもとづく「条約」が、大衆化され得る条件は、私にいわせれば、現在、いたる所に——「大衆社会」化現象のあらゆる隅々に成熟しているのだ。

つづいて各国からのメッセージが読みあげられる。——入国を拒否されたベトナム作家同盟から、サルトルから、アイザック・ドイッチャーから——率直にいわしてもらえば、これら国際的有名人物からのメッセージの中に、やや大時代な感じがあった。「帝国主義的侵略主義に対する、人民の英雄的闘争」といつた表現では、もう何も出てこない時代なのではあるまいか?

アメリカ側代表と、アメリカのベトナム反戦運動についての質疑応答によって、本会議がはじまる。——ジン教授が、この会議はスビーチコンテストではなく、日米両国民の、反戦平和の市民運動のための、具体的な連帯行動について論ずるものである。どうか発言は要領よくねがいたい、われわれには議論のためのレジャーがあるが、現在戦火の中にあるベトナムの人々にはレジャーがないのだから、と前おきして、質疑にはいつた。

会議がすすむにつれて、アメリカ側の反戦平和運動の困難さがよくわかる。——アメリカは、世界でもっとも保守的な労働組合をもつた「豊かな社会」であり、戦火に対して無疵の国であり、国民の大部分は、いま自国が数十万の軍隊と、途方もない量の弾薬と、大

重殺人民器を送りこんでいるベトナムという国を、地図の上でさすことができない。——このような状況下では、市民の平和運動は、まだいまの少数派にとどまらざるを得ない。日本の市民は、アメリカ国内の平和運動を、あらゆる可能な形で、支援してほしい。——

代表団の中には、いろんな職業の、いろんな人々がいた。彼らは必ずしも、主義主張において一致するものでなかったことは、日本側と同じだった。ある人は、著名大学の政治学の教授であり、ある人は左翼雑誌のエディターであり、ある人は教師で、ある人は復員軍人、二十二歳の女子学生もいた。しかし、彼らの一人一人が、一アメリカ市民として、自国が東洋の一小国に対しておかしつつある、道義的な罪に対して、どうしようもなくいらだち、恥じ、辛らがっているのはよくわかった。——彼らのおかれてある状況の方が、一応の平和憲法をもち、国民全体に「反戦」の風潮がしみわたっている日本の「運動家」たちより、はるかに困難であることはよくわかった。社会の密度からしてちがうのである。——私は、私たちにむかって助けをもとめる彼らの人間的な率直さと謙虚さ、辛抱づよさに感動した。いろんな意味で、彼らはナイーブな人たちだった。

日本側の発言は、国際会議なれしていないためもあり、屢々抽象的だった。——会議代表者からでなく、一般傍聴者からしばしばくりかえされたのは、戦争阻止は、労働者の組織的闘争のみによって成功する、という発言だった。これに対して、アメリカ側は、いちいち丁寧に、アメリカの労働組合事情を説明していた。CIO—AFLは、むしろ戦争を支持していること、黒人や有色人種の多い少数の組合の中でのみ、反戦を自らの人種差別の問題とむすびつけて考える風潮が出ていること。しかし、公民権闘争をはじめとする、アメリカ国内の問題とのむすびつきにおいて、ベトナム反戦の市民

運動が、拡大しつつあること。

「ちょうどいま、アメリカは、日本のアンボ闘争前期にある感じですよ」と、ジン教授はいっていた。

こうして会議はすすみ、三日目には、市民条約、日米市民へのよびかけ、反戦平和のためのアクション・プログラムをわかれて討議し、四日目の最終日、マス・ミーティングにおいて、条約締結式をおこなう所までこぎつけた。——条約の名称を、小田の原案通り「人民条約」にするか、「市民条約」にするかで、議論があり、結局「市民条約」にして、「市民、人民、どちらでも自由に解釈してください」と付記することにした。この時、発見しておどろいたのは、日本には「ピール」にずばり相当する適当な訳語がなく、「市民」「人民」「大衆」「民衆」「庶民」と、それぞれニュアンスの微妙にちがう言葉がやたらにあることである。アメリカ側は、この議論の意味がわからず、ボカンとしていた。——だが、いずれにしても、「条約」と「呼びかけ」と「プログラム」は採択され、マス・ミーティングの席上で発表締結された。締結後のティーチ・インで、南ベトナムからの留学生の発言に、ちょっと緊張する一幕もあった。——十五日、会議代表のある人たちは終戦記念国民集会に出席、のち送別晩餐会にむかうライシャワー夫妻に、しずかなデモ。十六日関西集会、日米双方とも、連日朝から晩までの会議と、むしあつさにクタクタになる。しかも、彼らは辛抱よく、日本側の「あたり前の人たち」は、精神的だった。

会議が終って、いくつかの感想を傍聴者からひろう。「時間が短い、もっとアメリカの人たちとついで話してみたかった」一婦人から。「こんなの生まぬるい」「市民条約なんておあそびだ」トロツキストの学生から。——アメリカ側の一人は、日本の学生の発言

に、ベトナム反戦と革命をむすびつけて考えているのが多かったことに、少しおどろいていた。私としては、アメリカ側の代表の一人である「復員兵と予備役軍人によるベトナム戦争終結のための委員会」代表と、「アメリカ人は知りたい」という婦人団体から派遣された、カンボジアに対する米空軍の爆撃を視察にいらしてきた、ユダヤ教の若い牧師さんが強く印象にのこった。——前者は朝鮮戦争に従軍した軍人であり、無口で、しずかで、しかし、あまりにも悲惨な死をたくさん見てきた人の、悲哀にみちた、こちらの胸にしみるような眼をしていた。後者は第二次大戦をはじめとする、ユダヤ民族迫害の歴史の影を背に負っているようだったし、大衆を相手にする職業らしく、率直で、具体的に、聴衆にわかりやすく、心から心へ語りかける言葉をもっていた。

いずれにしても、この会議は、何かまったく新しいことの始まりとしての価値と可能性をもっている。私自身、この市民条約の「大衆化」を、自分のプログラムとして課する気になった。この条約は、今後、日米間だけでなく、世界のありとあらゆる国の、「あたり前の人間」の間を、綱の目のようにむすんで行く方向にむかわねばなるまい。——私には、高度一万メートルの上空から見た、丸い地球の地平線と、雲の間からあらわれる、べつとりとした線におおわれた、ひらべつたい大陸が眼にかぶる。その大陸のあちこちにかたまって生きている、しごく当り前の人々の、さまざまな表情が眼にかぶる。極く少数の例外をのぞいて、人を殺したり、他人の生活を破壊したいとねがうことなく、ゆたかで平穏な明日の生活をのぞんでいる、ちつとも英雄的でない、当り前の人たち——働いて、家庭をもち、子供をうみ、貯金をし、時に夫婦喧嘩したり、ささやかな家庭の不幸や偶然の災害に見まわられたりしながら、それでも何

とかがんばって、生の営みをつづけて行く「平均的人類」——この人たちの誰が、みずから進んで、他者の災厄たりたいと思うだろう？ しかもなお、国家という、奇妙で抽象的な組織は、彼らを勇者、英雄、破壊者、殺人者に仕立てあげて。——同時に破壊と殺りくの被害者の立場にもおとしこむのだ。「生活」からくる破壊的闘争の問題は、跛行的ではあるにせよ、全世界的に見て、ほとんど解決される所までできた。——とすると、のこされた問題は、これら「平均的人類」間の、「平均的人類」自身による、「戦争」に対決する——同時に戦争強制力をもつ「国家」に対決する同盟だけだ。私には、その可能性は、あらゆる面で増加しつつあると思う。ジェット旅客機は、二十時間あまりで、地球上のほとんどあらゆる地点をむすぶ。一般旅行客の数はますますふえ、明日はこの時間をもっと短縮され、もっと大量化するだろう。全世界のあたり前の人間たちが、ぜいたくではない程度で自由にまねき、まねかれて、ひざをまじえて、「大衆ベース」の会議をどしどしおこなって行ける日はそう遠くない。郵便はスピードアップされ、テレビ、ラジオの国際中継も、国際電話の全自動回線化もある。——これらあらゆる手段を駆使して、無能にして、卑小な将軍や政治家たち——この危険な機械力の時代において、「戦争」の形でしか、問題解決の方法をとれない政治家は、まさに政治家として無能であり、失格者にほかならないではないか？——を、全世界の大衆が、追いつめる日も、そう遠くはないだろう。しかもなお、その日がくるまで、「平均的人類」の——つまり私たちの同胞の犠牲を、最少限にくだめなければならぬ。条約に署名してください。みなさん。